

蒲生干潟の地形変遷（４）

■概要

震災前の河口があった位置には、現在も導流堤が海中に没した姿で存在している。この導流堤をはさみ、南北で汀線の位置が異なる。8月の河口閉塞には、地盤沈下のほか、このことが関係している可能性がある。

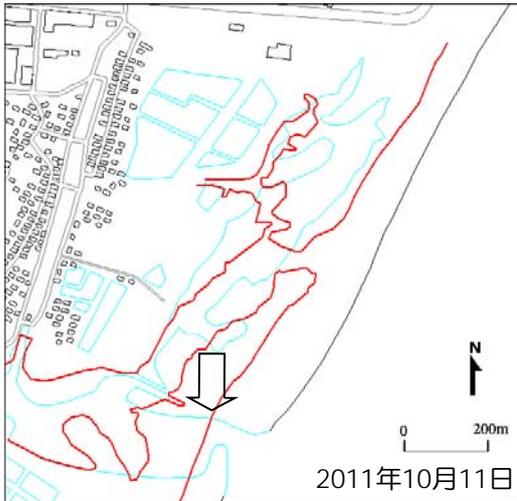


Fig.1 10月11日のトレース。

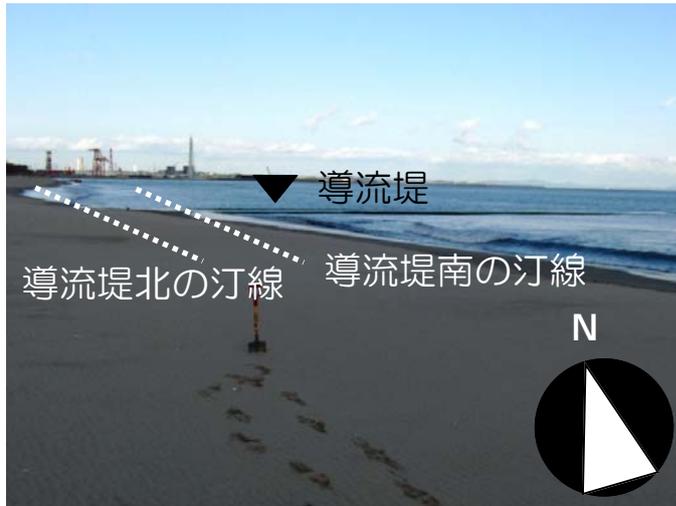


Fig.2 導流堤をはさんで南北で汀線の位置が異なる。位置はFig.1の矢印。

■導流堤と砂の堆積

仙台湾沿岸部の漂砂は南から北への沿岸流に左右される。七北田川河口部では沖（東）に向かってせり出したかつての導流堤が、汀線付近における漂砂を阻害し、導流堤南部での砂の堆積作用を強めている（Fig.2）。また、河口閉塞時の空中写真（Fig.3）から、河口南側の砂州が、北に向かって成長し、北側の砂州に癒合した結果、河川が閉塞した様子がうかがえる。導流堤が、砂浜を保全するために設置される人工の突堤の役割を果たしている。

また、新河口の北側では砂浜が沖合に向かい成長している。これは七北田川の砂の運搬作用によるところが大きいと考えられる。



Fig.3 河口が閉塞した七北田川（河北新報）

導流堤の南では、砕波帯が周辺に比較して、より汀線付近にある。このことは、導流堤の南が砂の堆積によって浅くなっていることを示す。河口右岸の砂州は、北の砂州に向かってプログラーションしていったことが読み取れる。

■まとめ

震災前にも七北田川河口は何度か閉塞しており、その原因についての研究が行われている（たとえば、稲村・田中;1998）。今回の閉塞は地震による地盤沈下や津波による砂浜の侵食、再形成など、これからの蒲生の地形変化を考えて行くにあたり、これまでとは異なる様々な要因を加味した考察が必要となる。

<文献>

稲村武彦・田中仁(1998)七北田川河口の完全閉塞条件に関する研究：海岸工学論文集。Vol.45,p.601-605。

（西城光洋）